

〈研究ノート〉

## 高齢化社会と地域福祉 (16)

——韓国農村地域における高齢者の生きがい感と関連要因——

高崎 義幸・日隈 健一

(受付 2009年11月2日)

### 目 次

- I 序 論
- II 調査地域の概要
- III 調査方法
- IV 分析結果と考察
- V まとめと今後の課題

### I 序 論

#### 1. 研究の背景と目的

社会・経済が安定期に入り、いわゆる成熟した社会を迎えたとわれ始めた頃から、同時に日本ではその安定・成熟した社会特有の現象ともいわれる少子・高齢化の進行や平均寿命の延伸化などに伴って生じてきた問題が社会問題化し、具体的な政策対応が緊急の課題となって今日に至っている。

なかでも経済の成熟期は経済の成長の停滞期、安定期でもあり、国や地域自治体にとっては税収の伸び悩みが社会保障支出財政の圧迫として現実化し、増大する高齢者の医療、保健、福祉予算の抑制が急務となった。そのためには先ず健康寿命の延伸対策として高齢者の「自立」をいかに促すかに全ての政策は重点化され、その「自立」を支える要素（ファクター、変数）を模索することが研究調査の課題ともなった。

そうした背景の中で本研究報告におけるキーワードを「生きがい（感）」とした。

「生きがい（感）」が日本の政策として登場したのは、1962年にはじまった老人福祉センターへの国庫補助であるとも言われている。その後は、「誰もが健康で、生きがいをもち、安心して生活を過ごす」ための「長寿、福祉社会」の実現を目標とした通称「ゴールドプラン」と呼ばれた高齢者保健福祉5ヵ年計画（1989年）や高齢社会対策大綱（2001）などに引き継がれ、さらには「新ゴールドプラン」なども出され、高齢者の雇用・就業の機会の確保や学

習・社会参加活動の促進、介護予防活動の促進が図られ、保健へと政策の重心が移ってきた。また民間分野においては、企業の雇用期間の延長や目的集団（NPO・NGO など）の活動が広がりを見せる中で、生産活動や健康維持活動を支援・創造していく際のキーワードとして「生きがい」という言葉が国や地方自治体の施策や研究者の間で頻繁に使用され、高い関心を集めるようになってきた。

しかし、日本語で「生きがい」という言葉は“生きる張り合い”として、馴染み深いものであるにもかかわらず、その意味は多義的で、どちらかというといまいで国や地方自治体の計画などにおいてもはっきりとした定義づけがあったわけでもない。そのため「生きがい感」の測定尺度設計においてさまざまな模索が試みられている。

例えば、近藤（2007）や鶴若（2003）らの指摘では、1960年代から70年代にアメリカで開発された主観的幸福感や生活満足度を測定するための尺度が日本語に翻訳され、それが「生きがい感」の測定尺度として代用されてきた経緯がある。また、「生きがい」は生活満足度と関連するという報告（藤本，2004）や健康寿命あるいは高齢者の生活態度、生活満足度との正の関連があるという報告が多い。なかでも高齢者の「自立度」とは強い関連があるということの中で、農山村と都市など地域特性とにおいても違いがあることなど具体的調査研究がある（日隈ほか，2003，高崎・日隈，2006，2007，2009）。

高齢者比率の増加と低経済成長下での財源の圧迫という現実の中で選択された高齢者の「自立」、それを支える「生きがい」との関係性が明らかになった以上、それに向けての高齢者支援施策の実践や研究がさらに有効に行われるためにも高齢者の「生きがい」の概念や関連要因がさらに明確にされる必要性があった。

それとともに「生きがい感」を測定する尺度の客観的妥当性と信頼性を高めることが急がれた。しかし社会学的研究としては多様な文化や社会環境下、その時間軸と空間軸において生活する高齢者の、その「生きがい感」が変容するという事実も確認される必要があった。そのうえで、「生きがい」を測る尺度および「生きがい」の関連要因、影響要因がそれぞれの地域社会のもつ背景によって時間的にも空間的にも特長をもつが、高齢者の「自立」という点に関しては「生きがい」が大きな要因となっている、という仮説を立証するものでなければならなかった。そうしたうえで政策対応上の変数（要因）となるからである。

## 2. 研究目的

本調査研究の目的は、韓国の農漁村地域在住高齢者の「生きがい」の対象とその「生きがい」関連要因の実態を把握し、その尺度（スケール）の客観化のために「生きがい（感）」の普遍性、地域性を検証し、その基礎資料をつくること。また同時に、近藤・鎌田（2003）が日本人高齢者の調査を通して作成した「生きがい感」スケールの普遍性と信頼性を社会背

景の異なる韓国の農村地域における高齢者の調査を通して検証することにある。

### 3. 研究の限界点

本研究における調査対象地域が、韓国の農漁村地域における地域高齢者であること、および30ケースという限定条件下での実施には、課題も残されるが、先行調査としては有効だという判断がある。

## II 調査地域の概要

本調査対象地域である韓国全羅南道海南郡B面(町)(人口3,522)は、朝鮮半島最南端の地である海南郡の南東に位置し海南郡と康津郡、莞島郡を結ぶ架橋の役割をしている面(町)でもある。

B面(町)の東側は達磨山と頭輪山の山勢に囲まれ、西と南側は海に面している。海は世界有数と地域の人々は自慢するほどの広大な干潟が広がり、多種多様な生物が生息し、そのため、海苔の生産がさかんで、それを中心に人びとの生業は支えられている。また、観光開発の一環として集落ごとに生態体験型観光テーマ<sup>1</sup>が指定されており、水産資源保護区域に指定された自然のなかでさまざまなテーマの体験ができるようになっている。

B面(町)から海南郡の中心地である海南邑(郡庁所在地(人口26,095))までは、時間距離にして自動車ですら約40分、そのため中心部への通勤・通学者も少なくない。さらに、全羅道地方の文化・教育の拠点である光州広域市(人口120万人)までは、約2時間の距離にある。行政区域は法定里(村)8、行政里(村)22、自然マウル(集落)23で構成されている。

以下、B面(町)の人口、主要施設、住民組織、農水産業生産現況を表で示した(表1～4)。

人口現況についてみてみると、一世帯当たりの人数は全国平均が2.94人、B面の属する海南郡が2.37人なのに対し、B面は2.1人といずれの平均をも下回っている。また高齢化率は、全国平均が10.2%、海南郡が24.8%なのに対して、B面は30.6%といずれの平均をも大きく上回っている(表1)。

B面(町)における主要施設の現況を表2に示した。

保健支所は面の中心部に1箇所あり、医者1名(医大を卒業した後、兵役の代わりに服務する制度を利用した者)と保健士2名(郡庁職員)が勤務している。保健診療所は面(町)の保健支所から離れたところに2箇所あり、保健士が1名で勤務している。一般の病院より

1 農村伝統テーママウル、漁村体験マウル、干潟体験マウル、キムチ体験マウル、緑農村マウルなどがある。

表 1 世帯および人口 人 (%)

世帯数	一世帯当人数	人 口			高齢化率 (全国平均)
		合計	男性	女性	
1,678	2.1人	3,522	1,678	1,844	30.6% (10.2%)

(韓国統計庁資料 2007)

表 2 主要施設 (単位：個数)

学 校	機 関			医 療 機 関				宗 教 施 設	
	郵便局	農・漁協	老人福祉	保健支所	保健診療所	医院	薬局	教会	寺
小 中 高 1 1 1	1	2	1	1	2	4	3	11	5

(海南郡統計年報 2008)

も安価で診療を受けることができるとあって人びとに重宝されている。老人福祉施設は、韓国で2008年7月からの老人長期療養保険の施行にともない、小規模多機能型施設として2009年6月に運営を開始した高齢者福祉施設が1つある。2009年10月現在、入所、ショートステイ、デイケア、訪問介護を含めて20名弱の利用者がいる。

B面(町)における農水産業の状況を表3に示した。

農水産業生産では米の生産量が最も多く、麦、大蒜、白菜と続いている。表3で見られるように海苔の養殖に大きく特化した地域である。とくにB面Y里には海苔工場が8ヶ所あり、加えて魚類や海藻類の漁獲高も高い。

総じて海苔の生産、加工工場に勤め自家用の米その他の生産に関わり、若年層はソウルや光州などの都市部へ移住、通勤するという形態である。

表 3 農水産業の現況 (単位：ha, M/T)

区 分	米	麦	薩摩芋	大蒜	白菜	蔬菜	果樹	花卉	茸	唐辛子	海苔	魚類	甲殻類	軟体類	海藻類
生産量	882	303	4.6	304	108	6.6	59	2.1	1.8	38	4,572	570	125	101	4,321

(海南郡統計年報 2008)

### Ⅲ 調 査 方 法

#### 1. 調査の方法

##### 1) 調査対象および調査期間

調査は2009年8月の時点で、韓国全羅南道海南郡B面に在住する65歳以上の男女を対象に

行った。調査方法は、調査員が直接自宅を訪問し、設問用紙を用いた面接調査を行い、35名から回答を得たが、欠損値のあるものを除いた30人（男性15人、女性15人）を分析の対象とした。

## 2) 調査票の構成と内容

調査票は「基本的属性」、先行研究において「生きがい感と関連性がある」と報告されている項目、「生きがいを感じる時」（第6回高齢者の生活と意識に関する国際比較調査、2005、内閣府）、「高齢者向け生きがい感スケール（K-1式）」（近藤・鎌田、2003）から構成されている。

調査項目の具体的な内容は以下の通りである。

### (1) 「基本的属性」

「年齢、性別」、「信仰」（ある／なし）、「世帯構成」（独居・配偶者・子ども・嫁または婿・孫・親・その他）、「世帯人口」、「暮らし向き」（とても困難だ・困難な方だ・普通・豊かではないにしても心配ない方だ・豊かな方だ）、収入のある仕事（している／していない）。

### (2) 「生きがい感と関連する項目」

「生きがい感と関連する項目」は、「全般的な健康状態」（健康ではない／あまり健康でない方だ／どちらかといえば健康なほうだ／健康である）、「在住地域に対する満足度」（とても不満だ／少し不満だ／だいたい満足だ／大変満足だ）、「最も大切なもの」（家族／友達／隣人／財産／健康／地位・名誉／趣味／信仰／その他）、「相談相手」（いる／いない）、「将来の夢」、「これからやりたいこと」（ある／なし）。

### (3) 「生きがいを感じる時」

「生きがいを感じる時」は、内閣府が高齢化問題基礎調査として、日本の高齢者と諸外国の高齢者の生活意識を把握するため、日本及び外国4か国を対象国として5年毎に行っている「高齢者の生活と意識に関する国際比較調査」から用いた。

「生きがい」（生きていることの喜びや楽しみを実感すること）を感じるのはどのような時ですか？という質問に対し、該当するものすべてにチェックを入れるようになっている。最高点は17点である（表4）。

### (4) 「高齢者向け生きがい感スケール（K-1式）」（近藤・鎌田、2003）

高齢者の「生きがい感」を測定する尺度として、高齢者向け「生きがい感尺度」（K-1式）を用いた。尺度は全16項目で、「自己実現と意欲」「生活充実感」「生きる意欲」「存在感」の4つの下位要因からなっている。質問に対し、はい（2点）、どちらでもない（1点）、いいえ（0点）で回答するようになっており、合計点を「生きがい感得点」とする。最高点は32点（16×2）である。ただし、2、4、9、12番の項目は逆転項目となるため、配点が逆となる（表5）。

表 4 「生きがい」を感じる時

生きがいを感じる時
1. 仕事にうちこんでいる時
2. 勉強や教養などに身をいれている時
3. 趣味に熱中している時
4. スポーツに熱中している時
5. 夫婦団らんの時
6. 子どもや孫など家族との団らんの時
7. 友人や知人と食事、雑談している時
8. テレビを見たり、ラジオを聞いている時
9. 社会奉仕や地域活動をしている時
10. 旅行に行っている時
11. 他人から感謝された時
12. 収入があった時
13. おいしい物を食べている時
14. 若い世代と交流している時
15. おしゃれをする時
16. 犬や猫などのペットと過ごす時
17. その他
18. わからない

内閣府 (2006)

表 5 高齢者向け「生きがい感」スケール (K-1 式) と得点化要領

項 目	はい	どちらでもない	いいえ
1. 私には家庭の内または外で役割がある	2	1	0
2. 毎日を何となく惰性で過ごしている	0	1	2
3. 私には心のよりどころ、励みとするものがある	2	1	0
4. 何もかもむなしと思うことがある	0	1	2
5. 私にはまだやりたいことがある	2	1	0
6. 自分が向上したと思えることがある	2	1	0
7. 私がいなければだめだと思うことがある	2	1	0
8. 今の生活に張り合いを感じている	2	1	0
9. 何のために生きているのかわからないと思うことがある	0	1	2
10. 私は世の中や家族のためになることをしていると思う	2	1	0
11. 世の中がどうなっていくのか、もっと見ていきたいと思う	2	1	0
12. 今日は何をしてすごそうかと困ることがある	0	1	2
13. まだ死ぬわけにはいかないとと思っている	2	1	0
14. 他人から認められ評価されたと思えることがある	2	1	0
15. 何か成し遂げたと思えることがある	2	1	0
16. 私は家族や他人から期待され頼りにされている	2	1	0

近藤 (2007)

### 3) 分析変数の得点化

#### (1) 従属変数

従属変数は、「生きがい感」スケールを得点化したもの（最高32点）とした。

#### (2) 独立変数

世帯人口は、人数が多いほど得点が高くなるようにした。暮らし向きは、「とても困難だ（1点）」～「豊かな方だ（5点）」とし、肯定的な回答ほど得点が高くなるようにした。収入のある仕事は、「している（=1）」「していない（=0）」とするダミー変数とした。全般的な健康状態は、「健康ではない（1点）」～「健康である（4点）」とし、肯定的な回答ほど得点が高くなるようにした。在住地域に対する考えは、「とても不満だ（1点）」～「大変満足だ（4点）」とし、肯定的な回答ほど得点が高くなるようにした。相談相手は、「いる（=1）」「いない（=0）」とするダミー変数とした。将来の夢、これからやりたいことは、「ある（=1）」「なし（=0）」とするダミー変数とした。「生きがいを感じる時」は、該当する個数が「0～4個（1点）」「5～9個（2点）」「10～14個（3点）」「15～17個（4点）」とした。

#### (3) 調整変数

調整変数は、年齢及び性別とした。性別は「男性（=0）」「女性（=1）」とするダミー変数とした。

### 4) 分析方法

「生きがい感」得点に対する交差分析を行い、 $\chi^2$ 検定を行った。次に「生きがい」の対象数と「生きがい感」得点に対する集団別の平均分析を行い、t検定を行った。高齢者向け「生きがい感スケール」（K-1式）の信頼度分析を行った。

統計ソフトは SPSS 12.0K windows 版を使用し、有意水準は5%未満とした。

## IV 分析結果と考察

### 1. 調査対象者の基本的属性

調査対象者の基本的属性を性別に表6に示した。

このうち、性による統計的に有意な違いがみられたのは、同居家族構成の配偶者および同居人数の2項目のみであった。家族構成で「配偶者のみ」と答えたのは男性が9割弱と圧倒的で、女性は「一人暮らし」と「配偶者のみ」が同様の数値で、「一人暮らし」は女性の方が4倍高い。また「収入のある仕事」をしているのは、男女とも同様の割合であるにもかかわらず、「暮らし向き」は男性の80%が「普通」と答え、女性は46.6%が「困難」と回答して



表 6 調査対象者の基本的属性

(単位：人(％))

項目	内容	男性	女性	男女差
1. 性		15 (50)	15 (50)	N.S.
2. 年齢	77.6±4.5	76.7±4.7	78.5±4.2	N.S.
3. 宗教(信仰)の有無	あり	4 (26.7)	6 (40.0)	N.S.
	なし	11 (73.3)	9 (60.0)	
4. 同居家族の構成 (複数回答)	一人暮らし	2 (13.3)	8 (53.3)	N.S.
	配偶者のみと	13 (86.7)	7 (46.7)	P<.05
	子ども	0 (0.0)	0 (0.0)	N.S.
	嫁または婿	0 (0.0)	0 (0.0)	N.S.
	孫	1 (6.7)	1 (6.7)	N.S.
	親	0 (0.0)	0 (0.0)	N.S.
5. 同居人数	独居	2 (13.3)	8 (53.3)	P<.05
	2人暮らし	12 (80.0)	6 (40.0)	
	3人暮らし	1 (6.7)	1 (6.7)	
6. 暮らし向き	とても困難だ	0 (0.0)	2 (13.3)	N.S.
	困難な方だ	3 (20.0)	5 (33.3)	
	普通	12 (80.0)	8 (53.3)	
	豊かにしても心配ない方だ	0 (0.0)	0 (0.0)	
	豊かな方だ	0 (0.0)	0 (0.0)	
7. 収入のある仕事の有無	している	9 (60.0)	8 (53.3)	N.S.
	していない	6 (40.0)	7 (46.7)	

いることから、韓国農漁村特有なものである可能性も考えられることから、更なる調査が必要である。

## 2. 交差分析

調査対象者の基本統計量と性別による差異を表7～10に示した。

### 1) 性別による「生きがい」関連要因

「生きがい」関連要因について、性による違いがみられたのは、「地域に対する満足度」のみであった。具体的には女性のほうが地域に対する満足度が有意に高い。しかし、数値を追ってみていくと、「地域」に関しては、男性は女性に比べて不満度が高い。また最も「大切なもの」と感じるのは女性は「家族」(42.9%)が最も高く、次いで「健康」(35.7%)であるが、男性は圧倒的に「健康」(76.9%)が高く、次いで「家族」(23.1%)の順であり、「相談相手の有無」では男性は90%以上が「いる」で、女性は4人に1人が「いない」と答えている。また、有事のとき「最も信頼できる人(もの)」では男性(66.7%)、女性(60.0%)共に「子ども」が高く、男性は「配偶者」(33.3%)が続いているが、女性は「隣人、友人」



表7 性別による「生きがい」関連要因

(単位：人(％))

項目	内容	男性	女性	男女差
1. 全般的な健康状態	健康でない	2 (13.3)	5 (33.3)	N.S.
	あまり健康でない方だ	4 (26.7)	6 (40.0)	
	どちらかといえば健康なほうだ	6 (40.0)	3 (20.0)	
	健康だ	3 (20.0)	1 (6.7)	
2. 地域に対する満足度	とても不満だ	5 (35.7)	0 (0.0)	P<.05
	少し不満だ	7 (50.0)	10 (66.7)	
	だいたい満足だ	2 (14.3)	5 (33.3)	
	大変満足だ	0 (0.0)	0 (0.0)	
3. 最も大切なもの	家族	3 (23.1)	6 (42.9)	N.S.
	友達	0 (0.0)	1 (7.1)	
	隣人	0 (0.0)	0 (0.0)	
	財産	0 (0.0)	1 (7.1)	
	健康	10 (76.9)	5 (35.7)	
	地位・名誉	0 (0.0)	0 (0.0)	
	趣味	0 (0.0)	0 (0.0)	
	信仰(宗教)	0 (0.0)	1 (7.1)	
	その他	0 (0.0)	0 (0.0)	
4. 相談相手の有無	いる	14 (93.3)	11 (73.3)	N.S.
	いない	1 (6.7)	4 (26.7)	
5. 有事の際、最も信頼できる人(もの)	配偶者	5 (33.3)	1 (6.7)	N.S.
	子ども	10 (66.7)	9 (60.0)	
	孫	0 (0.0)	0 (0.0)	
	隣人	0 (0.0)	2 (13.3)	
	友人	0 (0.0)	2 (13.3)	
	公的機関・福祉施設等	0 (0.0)	1 (6.7)	
6. 将来の夢・これからやりたいこと	ある	5 (33.3)	1 (6.7)	N.S.
	なし	10 (66.7)	14 (93.3)	

(13.3%)が高くなっている。女性の場合、男性に比べて1人暮らしの比率が高かったため、配偶者以外の比率が自然と高くなったものと推測できる。また、日常子どもと同居しているわけでもなく、遠方に離れているにもかかわらず子どもを最も信頼する傾向がある。それは日韓の農村部での調査報告、日隈(2003)、高崎(2007)と同様農漁村地域特有の生活の地域相互扶助の伝統が残っていると推測できる。また、「将来の夢・これからやりたいこと」については、男性が66.7%、女性の93.3%が「なし」と答えているのはどういう意味で、どんな背景があるのか次回調査の課題としたい。

## 2) 性別による「生きがい」を感じる時

性別による「生きがい」を感じる時を表8に示した。検定は $\chi^2$ 検定を行った。性差による統計的に有意な違いが現れたのは「趣味に熱中している時」、子どもや孫など家族との団

らんの時」, 「テレビを見たり, ラジオを聞いている時」の 3 項目であった。男性の場合, 仕事や趣味, 旅行, 他人から感謝された時などから分かるように, 外交的, 社会的活動に「生きがい」を感じる傾向にある。女性の場合, 子どもや家族との団らん, テレビ・ラジオ視聴, 友人・知人との交流, 食事など家庭の内やごく近い者との関係に「生きがい」を感じている傾向がみられた。このように女性は男性に比べ家庭外での活動が少なく, 家庭内に目が向いていることは, 日隈ら (2003) も指摘しているが, 韓国の農村地域においていまだ根深く残っている伝統的儒教観念, すなわち男尊女卑の観念の影響によるものだと考えられる。それはたとえば, むらの寄り合いや行事などにおける地位・役割の差 (男性は常に表舞台で女性は裏舞台) において顕著である。

また B 面 Y 里における実地調査によると, 男性は農作業が終わると (あるいは農閑期も) <sup>チュマク</sup>酒幕と呼ばれる居酒屋や亭子<sup>チョンジャ</sup> (あずまや), 縁側などに集まって宴会をして遊ぶことが多いが, そのような場所で女性の姿を見かけることはまずない。韓国の農村地域では男女の性的

表 8 「生きがい」を感じる時 (単位: 人 (%))

項 目	男 性	女 性	男女差
1. 仕事にうちこんでいる時	11 (73.3)	6 (40.0)	N.S.
2. 勉強や教養などに身をいれている時	3 (20.0)	0 ( 0.0)	N.S.
3. 趣味に熱中している時	10 (66.7)	1 ( 6.7)	P<.05
4. スポーツに熱中している時	2 (13.3)	0 ( 0.0)	N.S.
5. 夫婦団らんの時	7 (46.7)	3 (20.0)	N.S.
6. 子どもや孫など家族との団らんの時	8 (53.3)	13 (86.7)	P<.05
7. 友人や知人と食事, 雑談している時	10 (66.7)	12 (80.0)	N.S.
8. テレビを見たり, ラジオを聞いている時	2 (13.3)	10 (66.7)	P<.05
9. 社会奉仕や地域活動をしている時	3 (20.0)	0 ( 0.0)	N.S.
10. 旅行に行っている時	11 (73.3)	6 (40.0)	N.S.
11. 他人から感謝された時	10 (66.7)	5 (33.3)	N.S.
12. 収入があった時	10 (66.7)	9 (60.0)	N.S.
13. おいしい物を食べている時	10 (66.7)	12 (80.0)	N.S.
14. 若い世代と交流している時	7 (46.7)	8 (53.3)	N.S.
15. おしゃれをする時	2 (13.3)	3 (20.0)	N.S.
16. 犬や猫などのペットと過ごす時	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)	N.S.
17. その他	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)	N.S.
18. わからない	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)	N.S.
※ 1~17の類型平均個数 (全回答数÷全回答者)	7.06	5.87	N.S.

役割や立場の違いが明らかに存在しており、現代においても農村における儒教の影響の強さを知ることができる。

### 3) 性別による生きがい感得点

本調査において、性による「生きがい感」得点の違いは、 $P < 0.05$  水準での統計的有意差は現れなかったが、表9および表12からみられるように総じて男性の「生きがい感」得点が高い傾向にある。「生きがい感」の平均得点は、男性の19.87点に対し、女性は15.40であり、今後サンプル数を増やせば有意差が現れる可能性があること、または本調査においては女性の方が「一人暮らし」、「暮らし向き」の「困難」が多かったことなどから、これらの条件の違いによって女性の「生きがい感」に対する平均得点が低く現れた可能性があることも指摘しておきたい。

表9 生きがい感得点 人 (%)

項目	男性	女性	男女差
0～12点	3 (20.0)	6 (40.0)	N.S.
13～16点	2 (13.3)	3 (20.0)	
17～23点	4 (26.7)	3 (20.0)	
24～27点	5 (33.3)	3 (20.0)	
28～32点	1 (6.7)	0 (0.0)	
全体	15 (100)	15 (100)	

この「生きがい感」得点の判定基準は、近藤・鎌田の高齢者向け「生きがい感スケール」(K-1式)の開発とともに作成されている。得点の判定基準は大阪府下都市部にある老人福祉センター3ヶ所における来所者の得点の標準偏差をもとに作成されている。

#### 判定基準

点数	32～28	27～24	23～17	16～13	12～0
評価	大変高い	高いほう	ふつう	低いほう	大変低い

(出所：近藤，2007)

### 4) 「生きがい感」得点に対する交差分析

基本的属性と「生きがい感」得点の交差分析の結果、「1人暮らし」よりも「2人暮らし以上」が有意に「生きがい感」得点が高かった。同居形態では、「生きがい感」得点が「大変低い」が1人暮らし70.0%，2人暮らし以上10.0%，「低い方」が1人暮らし10.0%，2人暮らし以上20.0%，「普通」が2人暮らし以上35.0%，「高い方」が1人暮らし20.0%，2人暮らし以上30.0%，「大変高い」が2人暮らし以上5.0%であった。

表10 「生きがい感」得点に対する交差分析

人 (%)

区 分		頻度 (%)	12~0 大変低い	16~13 低い方	23~17 普通	27~24 高い方	32~28 大変高い	$\chi^2$	有意度
性別	男	15 (100)	3 (20.0)	2 (13.3)	4 (26.7)	5 (33.3)	1 (6.7)	2.843	N.S.
	女	15 (100)	6 (40.0)	3 (20.0)	3 (20.0)	3 (20.0)	0 (0.0)		
同居 形態	1人暮らし	10 (100)	7 (70.0)	1 (10.0)	0 (0.0)	2 (20.0)	0 (0.0)	12.65	P<.05
	2人以上	20 (100)	2 (10.0)	4 (20.0)	7 (35.0)	6 (30.0)	1 (5.0)		
健康	健康でない方	17 (100)	8 (47.1)	3 (17.6)	3 (17.6)	3 (17.6)	0 (0.0)	13.09	N.S.
	健康な方	13 (100)	1 (7.7)	2 (15.4)	4 (30.1)	5 (38.5)	1 (7.7)		
暮らし 向き	困難な方	10 (100)	6 (60.0)	2 (20.0)	1 (10.0)	1 (10.0)	0 (0.0)	7.805	N.S.
	普通以上	20 (100)	3 (15.0)	3 (15.0)	6 (30.0)	7 (35.0)	1 (5.0)		
全 体		30 (100)	9 (30.0)	5 (16.7)	7 (23.3)	8 (26.7)	1 (0.3)	-	-

### 3. 集団別平均比較分析

性別、同居形態、暮らし向きによる「生きがい」の対象数および「生きがい感」得点に差があるかどうかについてt検定を行った。性別は「男性」と「女性」、同居形態は「独居」と「2人暮らし以上」、暮らし向きは、「困難（とても困難だ／困難な方だ）」と「普通以上（普通／豊かにしても心配ない方だ／豊かな方だ）」の集団に分類し分析を行った。

#### 1) 「生きがい」の対象数に対する集団別平均比較

性別、同居形態、暮らし向きによって「生きがい」の対象数に差があるかどうか分析するため、t検定を行ったところ、性、同居形態、暮らし向きのいずれも有意差はみられなかった（表11）。

表11 生きがいの対象数に対する集団別平均比較

区 分		頻度 (%)	平 均	標準偏差	t 値	自由度	有意度
性 別	男性	15 (100)	7.13	2.59	1.398	28	p = n.s.
	女性	15 (100)	5.93	2.09			
同居形態	独居	10 (33.3)	6.40	2.36	-.213	28	p = n.s.
	2人以上	20 (66.7)	6.60	2.46			
暮らし向き	困難な方	10 (33.3)	5.60	1.84	-1.549	28	p = n.s.
	普通以上	20 (66.7)	7.00	2.53			
全 体		30 (100)	6.53	2.39	-	-	-

#### 2) 「生きがい感」得点に対する集団別平均比較

性別、同居形態、暮らし向きによって「生きがい感」得点に差があるかどうか分析するた

め、t 検定を行ったところ、同居形態 ( $t = -2.565$ ,  $df = 16.1$ ,  $p < .05$ ) と暮らし向き ( $t = -2.241$ ,  $df = 28$ ,  $p < .05$ ) に統計的に有意差がみられた (表12)。

この結果と平均をみると、「生きがい感」得点は独居よりも、2人暮らし以上の方が高く、生活が「困難」よりも「普通以上」の方が高かった。

表12 「生きがい感」得点に対する集団別平均比較

区 分		頻度 (%)	平 均	標準偏差	t 値	自由度	有意確立
性 別	男性	15 ( 100)	19.87	7.02	1.849	28	p = n.s.
	女性	15 ( 100)	15.40	6.19			
同居形態	独居	10 (33.3)	13.3	6.81	-2.565	16.09	p < .05
	2人以上	20 (66.7)	19.8	5.96			
暮らし向き	困難な方	10 (33.3)	13.9	6.81	-2.241	28	p < .05
	普通以上	20 (66.7)	19.5	5.96			
全 体		30 ( 100)	17.6	6.89	-	-	-

#### 4. 先行調査研究との比較

本調査結果と先行調査研究の「生きがいを感じる時」と「生きがい感得点」についての比較を行った。

##### 1) 「生きがい」を感じる時についての比較

「生きがい」を感じる時について、本調査地域である韓国海南郡B面と韓国全国との比較を行うため、内閣府が高齢社会対策の一環として実施している国際比較調査で、第6回高齢者の生活と意識に関する国際比較調査<sup>2</sup>結果との比較を行った (表13)。

最も「生きがい」を感じる時は、どのようなときかについてみると、各国ともに「子どもや孫など家族との団らんの時」の割合が最も高くなっているが、B面は「友人や知人と食事、雑談している時」および「おいしい物を食べている時」、「子どもや孫など家族との団らんの時」の割合が同じ水準で高くなっている。本調査地域の高齢者は普段は家族と離れて暮らしているため、「子どもや孫など家族との団らんの時」と「友人や知人と食事、雑談している時」および「おいしいものを食べている時」の割合が同じ水準で現れたのではないかと推測できる。

B面の特徴は農村地域特有の「仕事」が高齢者の「生きがい」になっていることである。

2 世界5カ国 (日本、アメリカ、韓国、ドイツ、フランス) の60歳以上の男女を対象に行われた調査 (2005年度)。回収数は日本842、アメリカ1,000、韓国1,018、ドイツ1,023、フランス1,030ケース。

都市部の高齢者とちがって、生業としての農業そのものが生活の大部分を占めているためである。しかし今回の実地調査によると、農業を子どもたちに継いでほしいと考えている高齢者は皆無で、みな自分たちの代で終わりにしたいと答えている。それにはいくつか韓国農村地域特有の今日的な社会事情がある。第一に、都市と農村間の所得格差が大きい点であり、それはただちに生活・教育・文化水準の格差につながっており、青壮年層がより高次元の生活を求めて都市に移住する原因となっていること。第二に、伝統的な儒教観念下のもとでは農業を含む労働階級は卑下されること。第三に、農産物の価格が安いため労働時間や労働量、投資に対する対価が割に合わないこと。第四に、韓国社会は伝統的に父系の血縁の継承と祭祀権の相続を最も重要なものと認識しており、日本のように先祖伝来の土地を永続させるという考えは存在しない（加藤，1998）ことなどの理由が挙げられる。

設問：「生きがい」（生きていることの喜びや楽しみを実感すること）を感じるのはどのような時ですか？

表13 「生きがい」を感じる時 (複数回答) (%)

	B面	韓国	日本	米国	独 国	仏 国
1. 仕事にうちこんでいる時	⑤56.7	20.2	16.9	29.6	16.0	7.0
2. 勉強や教養などに身をいれている時	10.0	3.6	8.9	9.4	10.4	0.7
3. 趣味に熱中している時	36.7	15.8	②38.1	③42.9	④46.5	③33.2
4. スポーツに熱中している時	6.7	4.9	8.2	9.1	16.1	8.1
5. 夫婦団らんの時	33.3	25.3	25.5	39.1	38.4	⑤30.5
6. 子どもや孫など家族との団らんの時	③70.0	①63.2	①48.2	①71.2	①62.7	①63.8
7. 友人や知人と食事、雑談している時	①73.3	②46.6	⑤32.9	②59.1	②51.7	②34.3
8. テレビを見たり、ラジオを聞いている時	40.0	⑤26.0	③33.4	⑤42.0	39.7	28.5
9. 社会奉仕や地域活動をしている時	10.0	6.7	9.0	25.3	15.3	8.3
10. 旅行に行っている時	56.7	19.2	④33.3	41.9	③47.2	④31.1
11. 他人から感謝された時	⑤50.0	21.9	13.9	41.5	39.9	17.8
12. 収入があった時	④63.3	③42.0	7.7	21.3	14.4	3.5
13. おいしい物を食べている時	①73.3	④37.6	29.8	④42.6	⑤40.9	28.8
14. 若い世代と交流している時	50.0	11.7	8.8	28.6	16.7	17.1
15. おしゃれをする時	16.7	10.8	10.3	25.7	21.1	9.0
16. 犬や猫などのペットと過ごす時	0.0	2.3	9.4	23.8	17.0	16.4
17. その他	0.0	2.8	5.3	2.3	5.1	1.1
18. わからない	0.0	6.4	2.9	1.6	1.3	2.7
※1～17の類型平均個数(全回答数÷全回答者)	6.5	3.6	3.4	5.6	5.0	3.4

## 2) 「生きがい感」得点の比較

「生きがい感得点」点について韓国海南郡B面の高齢者と大阪府老人福祉センター来所高齢者（近藤，2007）との比較を行った（表14）。

この結果，海南郡B面の高齢者は，大阪府の老人福祉センター来所高齢者よりも生きがい感得点が低かった。性別で見ると，男性同士では平均得点にほとんど差がみられなかった（B面=19.87，センター=20.25）が，女性の平均得点に大きな差がみられた（B面=15.40，センター=21.60）。繰り返しになるが，B面の女性は一人暮らし，生活困難者が多かったことに加え，伝統的儒教観念が根強く残っている韓国の農漁村地域の高齢者と所得水準の上昇，高学歴化などを伴って，それからの「開放」が進んだ日本の大都市部における女性との価値観の違いが現れたのではないかと推測される。

表14 「生きがい感」平均得点

項目	N	平均	標準偏差
海南郡B面の高齢者	男性 (n=15)	19.87	7.02
	女性 (n=15)	15.40	6.19
	全体 (n=30)	17.63	6.89
日本老人福祉センター高齢者	男性 (n=117)	20.25	7.05
	女性 (n=131)	21.60	7.15
	全体 (n=248)	20.93	7.10

## 5. 高齢者向け生きがい感スケール（K-1）の信頼度分析

内的整合性による信頼性の検討を行うためスケールの信頼度分析を行ったところ，信頼性係数（クロンバックの $\alpha$ ）が0.778であり，内的一貫性のある妥当なスケールであることが示された。したがって，この近藤らによって日本の高齢者を対象にした調査を通して開発された生きがい感測定スケール（「高齢者向け生きがい感スケール（K-1）」）が韓国の農村地域在住の高齢者を対象とした調査においても，信頼性のある妥当なスケールであることが示された。

## V まとめと今後の課題

本調査研究は，韓国の農漁村地域における高齢者が「生きがい」とする，その対象と「生きがい関連要因」の実態を調査研究し，関連する先行研究との比較を通して今回の調査研究分析の結果の検証を行うことに目的があった。また，近藤・鎌田（2003）によって日本人高齢者の調査を通して作成された高齢者向け「生きがい感スケール」（K-1）の普遍性と信頼性を社会環境の異なる韓国農漁村B面（町）のケースに用いて，そのスケールの客観性の検証



を試行した。その結果、調査地域における高齢者の「生きがい感」は、「同居形態」と「暮らし向き」と関係していること、とくに伝統的儒教観念下で暮らす女性の価値観や生活態度は、男性に比べ内向的になりやすく、それらは「生きがい」を感じる時、「生きがい」の対象・源泉にも顕著に現れていた。また、女性の場合とくに農漁村地域特有の生業としての農漁業、および家族とのつながり以外に「生きがい感」を見出せていない傾向にあった。

韓国の調査地 B 面と類似した日本の純農村 G 町での調査（日隈他，2006）では、「生きがい」に関連する要因（複数回答）は、B 面が60%、G 村は62%が「収入がある仕事」をしていると答えている。その中で、日本の G 村における「生きがい」は「畑仕事」が90人中45人で最も多く、以下「テレビ」34人、「旅行」31人、「新聞」29人、「孫、子どもとの交流」22人、「グランドゴルフ・ゲートボール」29人、「お花、盆栽」20人の順であった。これは表13の同じ複数回答による「生きがい」における回答とはかなり異なっているが、農村特有のものである。たとえば表13の質問項目は日本と多少違いはあるが、日本の G 村と韓国 B 面と似た回答に「友人との時間の共有」や「畑仕事」に優先順位は高く、「子どもや孫」は遠く、その交流は非日常のものと分析できる。

さらに、加齢と日常生活動作能力（ADL）との関係性は、加齢とともに ADL は低下するが、それには個人差があることは明らかで、その境界線となるのは日本の G 村では85歳という年齢に見える。そのため、日常生活を支える道具的サポートを活用しようという意識が高まっていることも日本の G 村での調査結果からも検証された。

このように、今回の B 面の調査は工業化、都市化、高齢化が日本の経験よりも速いスピードで展開した韓国ということを踏えて、日本の経験とは違った社会現象をどう分析、評価するか。日本の経験がどこまで韓国の抱える課題、問題の解決策として有効性をもつのか、政策対応に有効性をもつという前提に立てば、今後の研究課題としては質問項目及びサンプル数を増やし、分析の質を高める必要がある。

なお今回の現地調査及び校正には日隈研究室の山石東吾君と藤田富貴君に協力してもらった。

## ■ 参 考 文 献

- 青木邦男（2009）。「高齢者向け生きがい感スケールの因子構造とその得点の検討」『山口県立大学学術情報 第 2 号 [社会福祉学部紀要]』。
- 岡本秀明（2008）。「高齢者の生きがい感に関連する要因」『和洋女子大学紀要（第四十八集）家政系編』。
- 加藤光一（1998）。「韓国経済発展と小農の位相」日本経済評論社。
- 近藤 勉（2007）。「生きがいを測る」。ナカニシヤ出版。
- 近藤・鎌田（2003）「高齢者向け生きがい感スケール（K-1 式）の作成および生きがい感の定義」『社会福祉学 43(2)』。日本社会福祉学会。

- 熊野道子 (2006). 「生きがいとその類似概念の構造」『健康心理学研究 19(1)』. 日本健康心理学会.
- 高崎義幸・日隈健一 (2009). 「高齢化社会と地域福祉(15)—高齢者の生きがい研究の地平—」『広島修大論集 49(2)』
- (2007). 「高齢化社会と地域福祉(13)—日韓高齢者生活意識比較調査2007—」『広島修大論集 48(2)』
- 野村千文 (2005) 「「高齢者の生きがい」の概念分析」『日本看護科学会誌』.
- 長谷川明弘ほか (2001). 「高齢者の『生きがい』とその関連要因についての文献的考察」『総合都市研究 第75号』. 東京都立大学都市研究所.
- 藤本弘一郎ほか (2004). 「地域在住高齢者の生きがいを規定する要因についての研究」『厚生指標 51(4)』. 財団法人厚生統計協会.
- 日隈健一・辰己佳寿子・高崎義幸 (2006). 「高齢化社会と地域福祉—広域合併後の高齢者の意識の変容—」『広島修大論集 第47巻 第1号』.
- 日隈健一ほか (2003). 『加齢に生きる人たち』. 広島修道大学総合研究所.
- 内閣府, 2008, 「平成20年版高齢社会白書」株式会社ぎょうせい.
- , 2006, 「第6回高齢者の生活と意識に関する国際比較調査」.
- 韓国統計庁資料 2005, 2007年
- 海南郡統計年報 2008年
- 海南新聞, 2008年4月18日
- , 2005年9月9日
- , 2005年3月18日

Summary

고령화 사회와 지역 복지 (16)

—한국농촌지역에서의 노인의 삶의 보람감과 관련요인—

Yoshiyuki Takasaki and Takeyoshi Higuma

본 조사연구의 목적은 한국의 농어촌지역에서의 노인의 ‘삶의 보람’ 대상과 그 삶의 보람 관련요인의 실태를 파악하여, 삶의 보람(감)의 보편성과 지역성을 알아보기 위한 기초자료를 작성할 것과 콘도·가마타 (2003)이 일본노인의 조사를 통하여 작성한 삶의 보람감 척도의 보편성과 신뢰성을 한국 농촌지역에서의 노인에 대한 조사를 통하여 검증하는 것이다.

조사는 2009년 8월 시점에서 한국전라남도 해남군 B면에 거주하는 65세 이상 노인을 대상으로 조사원이 직접 대상자의 집을 찾아가서 설문지를 사용한 면접조사를 실시하여, 30명(남성 15명, 여성 15명)을 분석대상으로 삼았다.

분석의 결과 조사지역에서의 노인의 삶의 보람감은 ‘동거형태’와 ‘생활수준’과 관련이 나타났다. 특히 여성은 남성에 비하여 내성적이며 그것이 ‘삶의 보람을 느낄 때’와 ‘삶의 보람의 대상·원천’에서도 나타났다.

노인용 삶의 보람감 척도(K-1)의 내적 정합성에 의한 신뢰성 검토를 위하여 신뢰도분석을 실시한 결과 cronbach  $\alpha = 0.778$ 이며 내적 일관성이 있는 타당한 척도인 것이 나타났다. 따라서 콘더가 일본노인을 대상으로 만든 삶의 보람감 측정 척도가 한국의 농촌지역 거주 노인을 대상으로 한 조사에 있어서도 신뢰성이 있는 타당한 척도인 것이 인정되었다.

앞으로 과제로서는 설문항목 및 표본수를 증가시키고 분석의 질을 높이는 것이다.